

地域に羽ばたけ！大学発エクステンションゼミ ～学びから地域交流へ～

A plan for nurturing students' tie to local community through "University Extension Seminar" project

～deepening students-residents exchange by learning together～

寺川ゼミ 寺川 children

西沢 太一，村田 智輝，小松原 颯，金森 雄一郎

指導教員 寺川 隆一郎

帝京大学 経済学部 寺川ゼミ

キーワード：コミュニティプレイス、エクステンション活動、学園都市、学生運営、場所作り

1. 諸言

八王子市は市内に 21 の大学・短大・高専があり、そこに在学する学生数は約 10 万人にもものぼる。そのため、毎年八王子市に転入してくる学生が多くいる。しかし、そのほとんどは卒業と同時に市外へ転出してしまう。人口コーホート図を見るかぎり、八王子市は、雇用機会や子育て環境が、他の自治体と比べて特段に優れている訳ではない（35 歳～59 歳の人口増が小幅）。進学という転入人口を獲得する機会（15 歳～24 歳の人口増が最大）を定住につなげられていないことは、人口減少トレンドの中での自治体存続に黄色信号を点す。

この問題を解決するには、転入学生に八王子市に愛着を持ってもらう必要があると考える。というのも、八王子市から出て行ってしまふ学生の多くは八王子市に住む理由がないのである（はちおうじ学園都市ビジョン（平成 29 年版）p.18）。学生時代に八王子市への愛着が育めれば、それは住み続ける理由の一つになるだろう。そのためにはキャンパス周辺に根差した人間関係を作れる「場」が必要である。本報告ではそんな場所づくりの一環として大学のエクステンション活動を学生主導で行う「大学発エクステンションゼミ」を提案した

い。

2. 目的

八王子市に下宿する学生の定住を促進し、八王子市の抱える転入学生の定着率低迷問題の解決を目指す。そのために、八王子市内の大学の学生が自分たちが面白いと思う大学での学びをキャンパス外に持ち出し、地域住民を巻き込んで、さらなる学びにつなげる活動（「大学発エクステンションゼミ」）を推進し、学生と地域住民間で交流の機会を設ける。パイロットケースとしてコミュニティプレイスマつまるを展開する松が谷地域での実施を想定する。

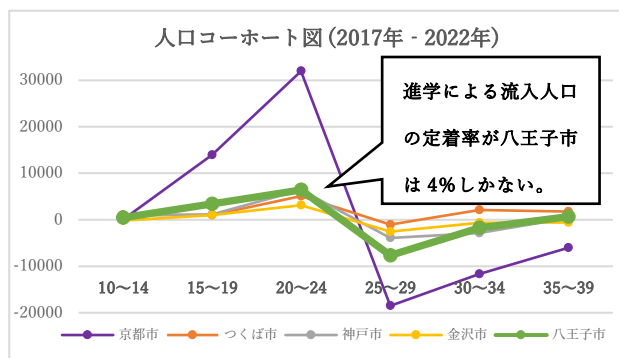
3. 現状の分析と考察

学校卒と同時に多くの人口が流出するのは「学園都市」に共通する特徴である。しかし「学園都市」を標榜する 5 自治体で比較したとき、直近 5 年間では、主に進学による流入人口の定着率が八王子市は著しく低い（つくば市は 25～34 歳人口がプラスのため 117%、京都市 34%。金沢市 22%、神戸市 9.8%、八王子市 4%）。もちろん高等教育機関の卒業年齢階級の入転出数は、その地域での雇用機

会の多寡に左右される。しかし本報告では、八王子市の定着率の低さの要因を、その学園都市としての特徴にも求めてみたい。

他の学園都市と比較したときに八王子に特徴的なのは、高等教育機関のキャンパスが、町の中心地から離れた郊外に点在していることである。いずれのキャンパスも広い敷地を誇るが、キャンパス内で学生生活が完結し、キャンパス周辺に学生が滞留するような、いわゆる学生街が存在しない。そうすると自ずと学生生活はキャンパスと自宅／下宿を往復する毎日になり、アルバイト・買い物・娯楽をするにも、ターミナル駅周辺の商業地に出向かざるをえなくなる。結果、学生は、キャンパスが立地する地域に帰属しているという意識が希薄になる。

こういった郊外型キャンパスでは、学生生活に必要な最低限のサービスも学校側が提供してくれる。そのため、学生生活はほぼ学校の管理下であり、生活面でも勉強面でも学生にあまり選択の余地がない。このある種の閉塞感からか郊外型キャンパスでは、学生はキャンパスに滞留しない傾向がある。他方で、キャンパス周辺は高度成長期に開発された住宅地であり、緑が多く閑静な住環境はあれども商店や飲食店が少なく住民同士でも交流する機会に乏しい。このような地理的要因から郊外型キャンパスの学生は「学校」の外に主体的に活動できる場所を、また地域住民は近隣に自宅とは別の、気軽に、日常生活を離れた交流の場を求める傾向にあると思われる。これらの潜在的欲求にこたえる場所として「大学発エクステンションゼミ」を提案したい。



出所：住民基本台帳

4. 提案

「大学発エクステンションゼミ」では、学生が大学での学びで面白いと思ったものを学外に持ち出し、地域の人に参加をしてもらうことで、学びを新たに展開させる。専門知識をそれほど必要としない哲学対話のようなワークショップであれば学生だけで運営は可能である。輪読や討論のような専門家が立ち会った方が議論を深められるような活動であれば、教員の協力をスポットで仰げば良い。

前提として、風通しの良い「場」をつくるには、自治体や大学からのアプローチではなく、学生が主導する必要がある。大学の通常エクステンション活動と違うのは、この学生主導という点にある。学生は学内での学びを自分たちの運営で外に展開することで、新たな学びや発見を得ることができる。そして、地域住民は普段関わることのなかった学生と活動を共にすることで、こちらも新たな情報や学びを得られるだろう。また、市の職員にも参加してもらえれば、地域住民と学生と本音で話せる関係を築くことで、市政にまた新たな視点で臨めるようになると思われる。三者の間に今までになかった新しい関係が築ければ、地域に対してポジティブな影響を与えるきっかけになるのではないかと。「大学発エクステンションゼミ」ではこういった関係がつかれるようなアイスブレイクなどの仕掛けを通して交流を深める。そうした交流の場ができれば、八王子市に住み続けたいような愛着が生まれる関係をつくるきっかけになるだろう。

5. 結論

八王子市は多くの大学を有する学園都市であるが、毎年の多数の転出者が問題である。そこに「大学発エクステンションゼミ」を取り入れることで、将来の八王子市民になり得る若者を手放さずに地域の活性化を図れるのである。この可能性を追求できる「場」づくりが、いま求められているのではないだろうか。